

★ 海外文献紹介 ★

“Learning More About Children and Families”

by Patricia Edminister

Childhood Education

January 1977

『Childhood Education』の一九七七年一月号は、「家族と子どもたちについてもっと知ろう」という特集の下に、成人（両親）教育の二つの実践報告、建国二百年祭の行事として、首都ワシントンのスミソニアン博物館でおこなわれた「昔の家族」写真展の紹介、そして青年の嗜好と十代の母親の影響をみた論文が集められている。特に、特集と同じ題名のパトリシア・アドミニスターの論文は、最近の米国における家庭の変化の実態と「良き親」作りの成人教育の実践例が報告され興味深いので、今回はこの論文を中心に紹介してみようと思う。また、エシー・リーの「嗜好、栄養、

そして十代の母」で紹介されている十代の母親 (child mothers) の増大も、最近の米国における家庭の実態の事例なので、それもアドミニスターの論文の中でふれていくことにする。

P・アドミニスターは、メリーランド州モンゴメリー郡の公立学校の成人教育科の両親教育の担当者で、この論文は、現在のアメリカの家庭と子どもをめぐる危機的状況の認識を背景として書かれている。それらは、急激な社会的価値観の変動にともないつつ表層にあらわれてきたものであるが、離婚数のかつてない増加（アメリカでは一九六七年でさえ、人口千人に対する婚姻率が十一・四、離婚率が四・〇、すなわち約三分の一が離婚する。ちなみに一九六六年の平均初婚年齢は夫二三・九歳、妻二一・四歳）私生児の増加、母親の家庭外就労の増加、さらに核家族化現象の急速な進行およびそれにともなう地域定着性の減少等が指摘されている。これらが全て家庭の形成、維持発展——とりもなおさずそれはそこにいる子どもの発達そのもの——にマイナスに働くものとし、アメリカ社会は減んでしまおうという予測や、かつての大家族制にかえるべきであるという主張をする人々が一部にいます。一方、このような状況の中でこそ現在の孤立無援の親たちを援助する様々の方法を探究すべきであるという主張が広がってき

つつある。

特にアメリカにおいては、核家族化現象の進行およびそれに伴う子育て術の伝達の障害という一般の問題にとどまらず、より切実な問題が下層に横たわっている。同月号所収の論文“Food Fads Nutrition and Teenage Mothers”によれば、一九七五年のデンバーにおける学生結婚 (School-Age Parenthood) に関する全国会議で次のようなことが報告されたとのことである。①今日のアメリカの母親の約二〇%は、ティーンエイジャーである。②十六人に一人が十七歳で母親になっている。③一九七四年に十七歳以下で子どもを生んだ女子は二十五万人。④一九七三年の全黒人の出生の四五%は私生児であり、そのまた半数(十二万人)の母親は十五〜十八歳であった。彼女らの大多数は極貧階層に属している。これらのショック的な実態を深部にかかえつつ「親役割のニード——Parental need——親であることの認識、親が親としてふるまいうるための基本的知識および子どもとのつき合い方の技法等に対するニード」が全般的に増大してきている。それに呼応して様々な成人教育が全米で始まりつつある。本論文の紹介する両親教育としての「ライフサイクルアプローチ」もそのひとつである。このプログラムは名称が示す通り、親のライフサイクル全般にわたるものであり、子ども及び親の発達段階に応じて生ずる様

々な問題について、広範囲にとりあげていることがひとつの特徴である。次に本論文に紹介されている三つのプログラムについて見ていきたい。

「乳児の発達と親」プログラム

「どこもたよれるところがないんです。うちの赤ん坊が泣いて泣いて……。抱いてやったりゆすつてやったり、昼も夜もおもりをしているのに疲れてしまったんです。私たちは最近ここへ越してきたばかりで、主人は新しい仕事でほとんど家をあけているし、私には知り合いは一人もいないし……。お医者様はどことも悪いところはないと言っていますが、私の方がもうくたびれてしまいました。いったいどうしたらいいんでしょう。」

このような乳児をかかえて悪戦苦闘(?)している親にこのプログラムがすすめられる。このプログラムでは、ベビーンッター共同組合の活用のような具体的な便宜と同時に、同じような問題をかかえ、共通の興味と関心をもった親子との交流が図られ、討論の場が与えられ、小児科医、心理学者、栄養の専門家等からの乳児の発達に関する基本的な知識を与えることによって、「親としての技法——parenting skill——」の向上を目ざしている。また、様々な発達段階の乳児に会うことで、彼らに自分の子ども今後の予測を与えること、さらに「年長の」赤ん坊の親たちに「年少

の「赤ん坊の親への、乳児の発達過程に関する知識の伝達者になつてもらうことを目ざしている。

「幼児の発達と親」のプログラム

「うちの二歳の子は、居間のじゅうたんの上に洗剤と水をいっぱい流して『お手伝いしてきれいにするの』と得意がっています。どこに行けば、この子の遊び相手がみつかるでしょうか。それにナースリースクールの選び方、排泄訓練のしかた、言葉の発達などについて話し合える場がほしいんですが。」

二、三歳の子どもとその親を対象にしてこのプログラムは組まれている。ここではまず第一回目のセッション(約二時間)で、親、教師、子どもの三者が、一緒に遊ぶところから始める。この活動を通じて遊びを楽しみ、それによって幼児の認知及び運動の発達が促されるように考案されている。次に、大人たちは隣室に移り、「親であること」に関する様々な問題について論議を交わし、その間、子どもたちは、教師と(当番の?)親に見守られて、遊びを続けるようになっていく。

これらの二つのコースでは、乳児への刺激的活動と、初期の自己同一性の獲得に関する知識と、親自身が自分の子どもとの教師となり観察者となれるような手だてを統合した完全なカリキュラムが作られ、訓練がなされている。これらのクラスの指導者は、大

学及び教育現場での経験をもち、更にこのカリキュラムをこなすための訓練を受けた人であり、親たちは子どもの発達の進行状況の記録者となり、有能な観察者となっていくことを援助される。

そのために特別な器材を使ったり、「ビネット」と呼ばれる子どもへの行動記録をとることが用いられる。「ビネット」は「肖像画」というような意味であるが、「子ども自身が自由に環境や他の人々に関わり合っている状況」の像を得ることによって、子どもの発達の状態を知り、環境の一部でもある親や教師の役割を明らかにしていく機能をもっている(同月号所収の論文 *Vignets of child Activity* を参照のこと)。子どもの記録者となり観察者となることを通じて、親の関わり方を学んでいくことができる。また、このクラスにはハンディキャップをもった親も迎え入れられる。親たちに勇気を与え、子どもたちに他の子どもと一緒に過ごす機会が与えられる。

特別プログラム

親のスキルの向上が乳幼児の発達にとっても重要であるという認識から出発したこのプログラムも、様々な親たちのニードに合わせて大きく広がってきつつある。「別居と離婚」「片親」「多動性の子の親」というようなプログラムも作られており(これは非常に成功した部門である)、一般からの要望によって「養子子の親」

というコースも新設された。また思春期の子どもをもつ家庭の問題、異世代間の相互理解の問題——いわゆる「世代の断絶」と言われた十代の子どもの親の問題だけでなく、もうすでに大人になった子どもと老齢になりつつある親の問題を含めている——等にも取り組み始めている。「親となること、親であること」と同様「年をとること、老人であること」も親のライフサイクルの重要な部分であり、このことに関するセミナーや公開討論会も開催されている。また毎年夏には専門家と協力して「成長する親——成長する子ども両親教育会議」といった日を設け、一般に公開している。この毎年の行事は様々な問題をかかえた親たちにとって非常にすばらしい情報交換と交流の場になっている。さらに多くの親や教師の要望に答えて「両親教育資料センター」も開設された。そこではこれらの問題に関する様々の書物、レコード、フィルム、器材等を用意し一般に公開しており「おもちゃ貸出し図書館」も併設されている。

以上が本論文で紹介されている成人教育プログラムの内容であるが、ここでとりあげられている諸問題は単にアメリカ的特殊事情によってのみ存在するのではなく、現在の日本においても大いに考えられるべきことからである。子捨て、子殺しとはいかない

までも、若い親が育児ノイローゼになる条件は整いすぎているとあっていいほどである。現に親となっている人もこれから親になる人も、子育て学や親学(?)を学ぶチャンスを全く与えられない。わずかに学校教育の「家庭科」の中でほんの申し訳程度にふれられるだけであり、しかもそれは女子のみに限られている。人生のどの時期にどんな方法で子育て学、親学を学ぶのがよいかということを含めて検討される必要があるように思う。

また本論文では、親であることの問い直しを、スキル(技法)を与えること、それを手がかりとして親自身が討論学習を積み重ねていくことにより親の成長を促しているが、この視点は今後考慮されるべきポイントになるように思う。というのは、日本では子育てをめぐる論議が、細かい育児技術に倭少化されてしまう傾向と、全く反対に「親のあり方」論的な道德的倫理的な問題に解消されてしまう傾向が強いように感じられるからである。どちらにも言えることは、その中で当の親自身が学び育つよりどころを提供されていないということである。「成長する子ども——成長する親」というテーマに十分に考えられるべきことである。親としてどう育っていくかは単に自分の子どもに対する責任の問題ではなく、その個人の成長の課題であり、同時に社会人として成長していく課題でもあるはずだと思う。(山口大学・友定啓子)